

---

# 女の子になった少年剣士

彰子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女の子になつた少年剣士

### 【Nコード】

N2918Y

### 【作者名】

彰子

### 【あらすじ】

幼き日から、強くなることだけを心の糧として生きてき少年剣士アルスは、敗北に傷心し、死に場所を探していた。彼が毒薬を飲み目が覚めると女の子になっていた！？殺伐とした世界しか知らなかった少年が家族愛そして知り合った少年との恋愛を通して、自分の生きる道を見つけていく！

## 第1話 挑戦と挫折

とある宇宙のとある惑星にある小さな大陸。

ここでは、サン族とムーン族という2つの民族が覇権を巡って戦争していた。

戦争は先進的な火器をもつサン族の圧倒的優位に進み、ムーン族は土地を失い、ついには森の奥ある小さな王国をわずか一つ残すのみとなった。

物質的にも精神的にも追い詰められたムーン族。

彼らの心によりどころになっっていたのは、古代の預言者が遺したある古文書の一節だった。

『ムーンの救世主、我が死より1000年目に一人生誕す。彼の武勇によって一族は悪しき蛮族を打ち破り、やがて平和な世界が訪れるであろう』

その1000年に近づいていたのだ。出どころのうさんくさい書物ではあったが、信じる者は多かった。王族の中にすら信奉者がいるくらいである。

書によると、救世主を産むことができるのは、特定の条件を満たした男子の剣聖と女子の舞姫だけであるという。

剣聖の条件は、王国で開かれる天覧剣術大会で優勝すること。舞姫の条件は舞踏会で剣術大会の優勝者に指名されることである。

この記述に基づき、ムーンの王は天覧の剣術大会と舞踏会を共に開催することに決めたのだ。

この決定に対し、國務大臣は王に訝しげな顔をして尋ねた。

「あのような迷信を信じるなどは、賢明な王らしからぬ判断ですな」

「わしとて、あのようなものを端から信じておらんよ。しかし、あれが民の心のよりどころになっているのは事実だ。これがきっかけで男は武術に励み、女も文化的な活動に興味をもってくれたらそれで十分。今は、民の士気を下げないことが肝要なのだ」

「もし、思惑どおりに救世主となるべき子どもが生まれ健やかに育たなければ？」

「そのときはそのときで次の手を考えよう」

剣術大会には優勝候補とされている者が2人居た。

1人は街の郊外の小さな道場でめきめきと頭角を現している豪傑リーズ。

男らしいごつい顔つきをした背の高い青年だ。女性には密かに人気があったが、本人がシャイなせいか、ご縁はなかなかない。

もう1人は貴族にも一目置かれている名門剣術道場の師範代の息子であるアルス。

師範代である父親はなかなかの豪傑であるが、本人は母親似の中性的な顔立ちの美少年である。

あくまで親の七光りでの評価であり本人の実力はさほどではないとも言われている。

リーズとアルス、出自は名門道場と零細の道場とそれぞれ全く違い、普通に暮らしている分には互いに接点がないはずであるはずだが、本人たちは旧知の仲であった。

幼少期、親から剣術の稽古を仕込まれるよりも昔に、偶然、河原で出会ったことがきっかけで、毎日のようにチャンバラごっこをやったのだった。

結果は10回勝負して、10回ともリーズの勝利。遊びのチャンバラでワンサイドゲームではつまらないので、リーズはハンデを与えたのだがそれでも10回中8回はリーズが勝ったのだった。

そして、アルスは悔しさのあまり泣きじゃくり、リーズがそれをなだめるのがいつものやりとりだった。

そうだった因縁があるので、この大会に向け、アルスにとっては、

幼き頃の借りを返す機会であると闘志を燃やし、リーズは懐かしい仲間との遊びの続きをするようなノスタルジーに浸っていたのだった。

剣術大会当日、リーズとアルスはそれぞれ順調にトーナメントを勝ち抜き、下馬評どおりに決勝戦はこの両者のカードとなった。

「泣き虫だったお前がよくここまで強くなったもんだな」

「僕にとっては君に勝つことだけが目標だった。今日は絶対に負けない！」

口上が終わると、互いに構え、剣と剣がぶつかり合った。勝負がついたのは一瞬だった。アルスの剣の刃先は折れ、宙に舞った。

リーズは剣の先をアルスの顔先に突きつけた。

「勝負有り！勝者リーズ！」

## 第2話 女の子になっちゃった!?

「リーズにはやっぱり勝てないや……」

試合後、アルスは傷心のままお城から遠く寂れた村にいた。質素な鍛冶屋がたたずんでいる以外には建物は無い。

しばらく、彼はしばらく熟考していたが、ついに思いつめたように手投げカバンの中から、薬のビンを取り出した。

アルスには試合前に、親から言いつけられていたことがあった。剣術大会で優勝できぬものが帰る家はない。

敗れたものは死をもって償え、と。もし、死ななかったら、刺客を差し向けられ、不名誉な形で殺すと。

薬のビンは知り合いの錬金術師からもらったものだった。

実験中のものではあるが、これを飲むと苦しまずに死ねると聞かされていた。家の錠には絶対に逆らえない。アルスはビンから、錠剤を5粒ほど取り出し、そのまま飲み込んだ。

（熱い……。体が燃えるように熱い。全身が、頭の前からつま先に至るまでが焼け付くようだ。苦しまずに死ねると聞いたのは嘘だったのか）

自害の手段を誤ったのかとアルスは後悔をしはじめていた。しかし、

しばらくして、意識が朦朧としはじめた。

それは睡魔に似ていた。ああ、これでやっと楽になれるのかと彼はまどろみに身を任せた。

……

アルスは目を覚ますとベッドの上に寝かされていた。

傍らには心配そうに中年の女性が顔をのぞきこんでいた。部屋の調度は暖色のものが多く、ぬいぐるみもいくつか飾られている。

香水のにおいが漂う。おそらく、女性の部屋なのだろう。

「ここは、街外れにある小さな鍛冶屋よ。大丈夫かい？」

（鍛冶屋……）

アルスは鍛冶屋の前で薬物自害を試みたことを思い出した。それがこうして、ここにいるということ、倒れているところをこの家人が助けてくれたのだろう。

アルスは自分が情けなくなった。戦いに敗れ、そのけじめもつけることすらできずなんと情けない人生だろうと。

「顔色があまりよくないようだからしばらくここで寝ときなさい。



お嬢ちゃん」

お嬢ちゃん。懐かしい響きだった。

アルスは中性的な顔立ちをしているせいか、幼少期は女の子と間違えられることがしばしばあった。

第二次性徴が過ぎて、男らしい体つきになるとさすがにそのようなことはなくなっただが、そのような呼び方をされると懐かしさを感じるのだった。

昔は女の子と間違えられるとムキになって男だと反論したものだったが、今のアルスにはそのような気力は残っていなかった。

身体を起こし、窓の外を見やると、牡丹雪が降り、もみの木に積もっていた。美しい光景だった。

アルスは自分の身の振り方ばかりを考えて、周囲を見る余裕がなかったせいで、こんな小さな感動すらも見逃していたのだった。

美しい景色から目を外し、うつむくと「おや？」とアルスは思った。身につけていたのはレースのついたピンク色のパジャマ、どう見ても女性用のものである。

男としての自我をもつアルスは急に恥ずかしくなった。

「おばさん。介抱してもらっている身で、こんなことを言うのも、なんです。べ、別の服はありませんか？ちよっとこの服は恥ずか

しいですっ!」

「すまないね、あたしが持っている寝巻きはこれともう一着しかないんだよ。そのもう一着は洗濯してまっているし。あとあとは息子と夫の男物の寝巻きしかないよ」

「だから僕は男……!」

身振り手振りをしながら、必死でアルスが説明しようとしたそのとき、肘のあたりにやわらかい異物が当たった。

それは男の身体についているはずのない膨らんだ胸だった。股の間を確かめてみるとついていべきものがなかった。アルスは思考が停止して動きが固まった。

「大丈夫かい?」

「鏡があれば見せてもらえますか?」

「はいよ」

おばさんは手近にあった小タンスの引き出しから、手鏡を取り出し、手渡した。

そして、アルスがおそるおそるのぞくとそこには見知らぬ少女の姿が映っていたのだった。睫毛が長く、丸っこい顔、肩まで伸びたロングの髪の毛。ほんのりと赤らんだ頬。試しに、アルスがはにかんでみると鏡の向こうの少女もはにかんだ。

「これが僕……?」

「自分の顔に見覚えがないって……。あんだ、もしかして記憶喪失かい？」

### 第3話 少年レオと家庭の団欒

「あんだ、もしかして記憶喪失かい？」

記憶は失ってないとアルスは否定しようとしたが思いとどまった。

このまま、自分が記憶喪失ではないことを主張したらどうなるだろうか。

当然、素性や身の上を話さねばなるまい。

そうすると、道場の人間が呼ばれ、この家に押しかけてくるかもしれない。

そう予測すると、アルスにとっては正体を明かすことにメリットがないものだった。

むしろ、赤の他人のような姿になっているのだから、このまま別人になりすました方がいい。そう思ったのだ。

「はい、そうです。私、自分がどこから来た誰なのか、全く思い出せないのです」

「名前も思い出せないのかい？」

「はい」

アルスは嘘をついたことで良心がずきりと痛んだ。

これで、自分の正体がますます名乗りにくくなったのだった。

「母さん。お客さんが来ているよー」

「はいはい。どちらさんだろうねえ」

女性が部屋を出ていき、入れ替わりに男の子が入ってきた。

おそらく、年頃はアルスより1つか2つくらい年下だった。

そして、アルスはこの男の子に見覚えがあった。

(最近どこかで会ったような……)

しかし、それがどこなのか全く思いだせないのだった。

「よ、よう……」

「はじめまして」

ぶっきらぼうにあいさつしてくる男の子にアルスは優しく微笑みかけ、丁寧にお辞儀で返した。

これで少しは女の子っぽく装えるだろうという計算があった。

すると、男の子は挙動不審にうつろつきまわり口をもごもごさせた。

「お、俺の名前はレオナルドって言うんだ！レオって呼んでくれよなっ！」

それだけを言うと、ぎこちなくピースサインを作り、そのままそくさと部屋から出て行った。

不思議に思っていると、しばらくして、おばさんが戻ってきて言った。

「うちの息子、レオって言うんだけども、何か妙なこと言わなかったかい？」

「いいえ。少しだけ、緊張をしているみたいだけども、別におかしな様子はなかったですよ」

「そうかい。まあ、緊張するのも無理もないね。あの子、同世代の女の子を見るのははじめてだから」

「そうなんですか？」

「ああ、この集落の近くにはかつて、鉱山があったんだよ。昔はともよくとれるものだから、若い人足がたくさん働いて賑わったものさ。けども、二十年ほど前にめばしい鉱物は掘りつくしてしまっただようでね。産業がなくなって、若い人はどんどん離れていってここに残ったのは昔から住んでいる年寄りばかりさ。ここに住んでいる若い子は、もうレオ以外には、男女の兄妹が2人いるだけさ。若いといってもまだ5歳と3歳なんだけどね」

おばさんは自嘲気味に苦笑いをした。

「そんな環境で育ったものだから、あの子は女の子とどう会話していいのか分からないのさ。無礼な態度をとるかもしれないけど許してやっておくれよ」

「あはは……」

本当は女の子じゃないんだよという含みを持たせた愛想笑いをアルスはしながらも、とんでもないところに来てしまったと思ったのだった。

その日の夕食、食卓を囲っているのはアルスとおばさんとレオナルド、そしてレオナルドの父親であるご主人の4人。

出されたのは、トマトをふんだんに使ったミネストローネだった。

オニオン、ポテト、セロリ、ズッキーニをはじめ多彩な野菜が入っている。

産業がない貧しい村という割には栄養バランスを考えた贅沢なスープだった。

「わあ！おいしそう！いただいていいですか？」

アルスは、少々大きさに驚いてみせた。男のくせにかわいこぶりっこしている自分自身に内心苦笑いしながら。

「はいはい。どうぞ。たくさん、召し上がってくださいな」

「お、俺もいただきます!」

レオナルドは自分の家の食卓なのに緊張しているようだった。

「ところでお嬢ちゃん。名前はなんていうんだい？」

ご主人から話しかけられる。

「あ……えっと」

アルスという名前は男でも女でも通用する名前ではあったが、正直に名乗ることには彼には抵抗があった。

こんな僻地とはいえ、いつ、道場の刺客が来るか分からないからだ。

「名前は覚えていません。記憶を失ってしまして」

「そうか。じゃあ、当面はアリシアって名前を名乗ってみてはどうだ?うちに、もし、女の子が生まれたらつけようと思っていた名前だ」

「ありがとうございます」

アルス、いや、アリシアはにっこりとほほ笑んで返答した。



食事もおおかた食べ終わり、だんらんムードになっていたころ、激しく扉を叩く音が響いた。

「こんな夜更けに誰だろうね」

おばさんが席を離れて応対に出た。

しばらく、おばさんと訪問者が口論しているのを見て、まずは主人、次いでレオナルド、最後にアリシアが玄関に向かった。

「だから、うちにはそんな人は居ません」

おばさんと言いあっていた相手にアリシアは見覚えがあった。

全身に黒いローブをまとい、その隙間から垣間見える鋭い目つき。マリファナの常用で黒ずんでしまった歯。

彼の名はゴルト、アルスと同じ剣術道場の生徒で、本業は刺客をやっている男だ。

この男がこの村を訪れる理由としてアリシアに考えられることはただ一つだった。

彼（女）が死んだのを確かめに来たのだ。

アルスが試合後に死に場所を探していたとき、尾行の気配を感じたので、なるべく撒くように歩き、振り払ったつもりでいたのだ。

しかし、どこかで痕跡を残してしまったのだらう。

こんなところまでつきとめられてしまっていた。

アリシアはゴルトと目が合い思わず体が強張る。

(バレたか?)

「お嬢ちゃん、どこかで会いませんでしたかな？」

「い、いいえ！」

「そうか、気のせいか。その怯えたような目つき、どこかで見覚えがあるのだが」

そう冷たい目つきで言われた瞬間、アリシアは全身が震えた。

「とにかく、うちにはアルスという人は居ませんからお引き取り願えませんか？ 4人家族でつましやかに暮らしているだけなんです」

おばさんがそう言うと、ゴルトはうつむき「分かりました」と一言だけ残すと、あっさりと引き下がった。

(納得をしたふりをしているだけだ。やつはもう一度来るつもりに違いない)

アリシアはそう直感したのだった。

## 第4話 2年後の約束

夜更けすぎ、アリシアは荷物をまとめて、鍛冶屋の家を発った。

これ以上、この家に居たらみんなに迷惑をかけてしまう。

そう判断してのことだった。

(ごめんなさい。本当はお礼の一つは言わなきゃいけないんだと思う。だけど、そんなことしたら、やさしいこの家の人たちはみんなして僕のことを引きとめてくれるだろう。そうなると、きつとその言葉に甘えてしまって、結果的にみんなに迷惑をかけてしまう)

アルスは幼いころから、剣術の達人となるように親から厳しく躾けられてきた。

愛だの情だのといったものはなるべく排し、朝も晩も、ひたすら戦うことだけを考えながら生きてきたのだ。

だからこそ、夕方に味わった家族団欒はアルスにとっては衝撃だった。

修羅の道しか知らなかったアルスにとって、家庭とは殺伐としているものだという彼の常識だった。

そして、その常識がたった一晚の食卓で崩れ去っていったのだ。

（本当はあの家族にもっと甘えたかった。だけど、僕にはそれを享受する資格はない）

雪が降り積もる中、村の出入り口である門の前に大きな人影をアルスは見つけた。

その人影の正体はアルスが予見していた通りの人物だった。

「やあ、鍛冶屋の家のお嬢ちゃんじゃないか。どこに行くつもりかい？」

（ゴールド……）

アルスは心をかき乱されつつも平静を装った。

「街に買い物にいくつもりです。薬草を切らしてしまっ……」

「こんな夜更けにかい」

「ええ」

横を通り過ぎようとしたとき、ゴールドはおもむろにアルスの腰に手を回し、抱き寄せた。

必死に抵抗するが女の体では引きはがすのは無理だった。

「気が弱いくせに無理に強がるうとするあたりは、あまり変わってないね、アルス坊ちゃん」

「アルスって誰ですか？私の名前はアリシアです！離してください！」

女の体ではこんな甲高い声を出せるのかと自分でもやや驚きながらも、アルスは村娘の演技を続けながら抵抗した。

「そうだよ。この目つきだ。この子犬のように怯えた目つき、これこそまさしくアルス坊ちゃんだ」

「私はそんな人じゃありません。離してくださいゴルドさん！」

そう言っつて、アルスは「しまった！」と思った。

「なんで、俺の名前がゴルドだつて知っているんだ。この村では本名を名乗らずに搜索してきたはずだが……」

痛いところを突かれ、アルスは沈黙してしまった。

「錬金術師の作った怪しい薬でも飲んで別人になりすましたとかそのあたりか。しかしまあ、坊ちゃんがこんな可愛い女の子になっていたなんて驚いたよ。おおかた、あと2年もすれば俺好みのいい女に育つんじゃないか。そうだ。いいことを考えた。道場には生きていたことは黙っておいてやるから、俺の女にならないか」

それはアルスにとって、ぞっとするような提案だった。

男に慰み者にされてしまう。しかも、こんな魂の汚れた男に。

「嫌だ！誰がお前の言うことなんか！」

「あの一家を皆殺しにすると書いてもか？」

「なっ！」

それはアルスにとって、自分の命を取られる以上にクリティカルな脅し文句だった。

「卑怯者め……」

「なんとも言えばいいさ。俺は欲しいものを手に入れるためには手段を選ばない」

そういうと、ゴールドは右手で数字の2を作った。

「2年後だ」

「2年後？」

「2年後の今日に、お前を迎えに来る。その間に逃げようとは思わないよ。もし、そうしたら、あの一家の命はないと思え。お前は逃げることでできない甘ったれ小僧だということは知っている。おっと、今はただの小娘だったな」

## 第5話 決意そして明日へ

ゴルドは去り、アルスは一人その場に残された。

（あの一家の命はない……か。きっと、ゴルドのことだから本当に僕がこの村から逃げたら殺すつもりなんだろうな。いや、ひよっとしたら、2年間逃げなくても口封じのために殺すのかもしれない。もともと、僕だけが死ねば全て解決したのに、あの善良な一家までもを命の駆け引きに巻き込んでしまったんだ。僕が死にそこなっただけに……）

アルスの胸中は罪悪感でいっぱいだった。

（今の僕にできる責任の取り方は一つしかない）

村はずれにある地割れ、そこからは深淵の闇がアルスをのぞいていた。

正確な深さは分からないが、ここに身を投げたら命がないことは明白だった。

（もし、僕がこれ以上生きながらえたら、あの一家だけじゃなくて他の村人たちとも付き合いをしていくことになるだろう。僕が村に長居をすればするほど迷惑をかける人数が増えていくんだ。それに、僕が責任をとって死んだと知ったら、いくらあの非情なゴルドでも、

一家を見逃してくれるかもしれない)

心を決めてアルスは深淵の間に歩を進めようとしたが、足が震えて動けなくなった。

(怖い……死ぬのが怖い……)

それはアルスがはじめて抱いた感情だった。

幼いころから戦士として育てられ、不名誉な敗北をしたときには死をもって償えと育てられてきたアルス。

彼にとって、死は躊躇すべきものではなく、不名誉を働いたときには、自らすすんで行くべきものだった。

実際にあの薬を飲む時も、何の疑問も持たずにそのまま口に放り込んだのだ。

だけど、今は死ねなかった。

アルスが崖下に足を踏み入れようとすると、脳裏におじさんやおばさん、レオナルドの優しい笑顔が浮かんでくるのだった。

胸から感情がこみあげ、やがて、暖かい液体が頬を伝ったのだった。

(涙……?)

物心のついたころまで記憶をたどっても、情などというものを理由



にして流した覚えのないもの。

それこそ、戦いで負けたときの悔しさくらいでしか流したことがないもの。

それが今になってあふれ出したのだ。

（誰にも見られてないとはいえ、こんなものを流すなんて恥辱だ。僕は、これでも名門道場で腕を磨いた剣士なんだ）

変わり果てた身になっても、誇り高い戦士としてのプライドがひらすらアルスの胸を締め付けるのだった。

10分間ほど嗚咽をあげた後、ゆっくりと立ち上がった。

「生きたい。帰ろう」

ゆっくりと、それでいながら、薄く積もった雪を踏みしめながら、アルスはもと来た道を引き返した。

その足跡はまるで、生まれてはじめて自分の意志で道を切り開いているかのようだった。

（ポジティブに考えるんだ。チャンスは2年間ある。その間にゴルドを説き伏せるか、あるいは隙を見て殺せばあの一家のピンチは回避できる。少なくとも、このまま死んで償って、見逃してもらおうなどという甘い考えよりは、その方がいくらか分の良い賭けかもしれない）

家についたころには地平線がほんのりと明るくなりはじめていた。  
家人は皆、静かに寝静まったままのようだった。

## 第6話 陽だまりの中で

「アリシアちゃん。その上の棚からシナモンをとってくれる？」

「はい」

アリシアは、やや低くなってしまった身長を補うべく、背伸びをして香辛料の入ったバスケットに手を伸ばした。

たった、2年しか与えられていない破滅への執行猶予期間。

その間に送ることのできる平穏な日常生活のありがたみを彼女は実感していた。

(もし、今こうして料理の手伝いをしている最中にゴールドがやってきたらどうなるだろう…)

アリシアは頭の中でシミュレーションをはじめた。

(狭い家の中で戦うとなると、大立ち回りはできないだろうから、剣は使い物にならない。台所にありそうなもので、護身用に使えるのは小型のナイフくらい。ドアや机も使いようによっては相手をひるませることができる。あとは……)

「アリシアちゃん？」

おばさんが心配そうに顔をのぞき込んでいた。

「あ、はい。ごめんなさい。ちょっと考え事をしていて……」

アリシアは、あわててバスケットの中からシナモンを探して手渡した。

「好きな男の子でもできたのかしら？」

予想外の言葉にアリシアは「あわわ」と驚いて、バスケットを思わず落としそうになった。

「冗談よ。どういう反応するかなと思って、言ってみただけ」

おばさんは生温かい目でアリシアを見ながら笑ってみせた。

(女の子の姿になっていたことをすっかり忘れていた。普通の人から見たら、僕が悩んでいる姿も、ただの恋煩いに見えてしまうのだろうか)

そう思うと、自分が悩んでいることなど、ちっぽけなもののようにアリシアには思えたのだった。

「さてと、朝食の準備ができたから、あのバカを呼んできて」

あのバカ。

おそらく、レオナルドのことを指しているのだろう。

瞬時に察してしまう自分もひどいものだとアリシアは軽く反省しながら、家の外に出た。

毎朝、自己鍛錬のために近くの山で剣の素振りをしている。

アリシアはそう聞かされていた。

「やあっ！とおっ！」

山から遠く離れたところからでも分かるくらい、威勢のいい掛け声が響いていた。

（うちみたいに暗殺術に片足突っ込んだ流派ではなさそうだ。どちらかというところと礼儀や精神を重んじる武道の類か）

アリシアは、当たっているかどうか定かではない加減な推測をしながら、レオナルドの姿を探し、そして、木がまばらな陽だまりの中に見つけた。

「えいっ！はあっ！」

レオナルドは息をはずませながら、大きなわら人形に木刀を叩きこむ。

寒い季節の割には薄着でうっすらと汗をかいている。

「ヘタクソ」

アリシアは思わず口を挟んでいた。

「なんだと！俺のどこがヘタクソだっていうんだ」

突然の訪問者に驚きつつも、間髪いれずに、レオナルドは言い返す。

「構えが隙だらけ。後ろから攻撃されたら一発でおだぶつだよ」

「ふん！女になにが分かるんだ！おふくろの前ではいい子ぶりやが  
つて！いつか、本性を暴いてやろうと思っただんだ！」

かっとなって突っぱねながらも、レオナルドはうつむいた。

迷いがあるようだった。

「どうすれば強くなれる……」

「脇をしめて肩の力を抜いたらいい。それを意識するだけでもマシ  
になるよ」

アルスは思いだした。

レオナルドと過去にどこかで会ったような記憶があったのだ。

だけど、それがどこだったのかが今の今まで分からなかった。

剣術大会の予選で戦った対戦相手。

我流と思われる流儀でやみくもに力任せに得物を振り回していた。

ちゃんとした師匠の元で指南を受けた経験がないことは明らかだった。

しかし、基礎も技術もないにも関わらず、時折みせる動きの鋭さには目を見張るものがあった。

辛うじて勝利を収めたものの、アルスは冷や汗を流したものだっ

（そうか。あいつか……）

アルスの脳裏には一つの考えが浮かんでいた。

（こいつに剣術を仕込んでみるのも悪くない。少しでも強くなったら、ゴールドが襲撃してきたときに足手まといが一人減って、戦いやすくなる）

そこまで考えて、アルスはふと我に返った。

一家を巻き込むことを前提にしている自分自身に対して嫌悪感を覚えたのだ。

（だけど、最悪の事態に備えておく必要があることには違いない。あらゆる可能性を想定して、どんなことが起きても、被害は最小限に抑えないといけない）

使いなれないたどたどしい女言葉でレオナルドをアリシアは誘ってみることにした。

「あたしの訓練を受けてみない？強くなることは保障するわ」

「いいのか？」

「もちろん！」

レオナルドが明るい顔を見せたのは初めてだった。



## 第7話 剣術修行と花嫁修業

「あー、疲れたー」

アリシアは部屋に戻るとスカートを肌蹴させ、大股を開いてくつろいでいた。

炊事、掃除、洗濯、それが終わったら、お花の稽古にお茶会。

ただの家事手伝いの域を一步飛び出して、まるで花嫁修業である。

(やさしいおばさんだと思っていたけど、意外としつけには厳しいんだよな。今、こつやってふしだらな格好をしているところを見られたら、どやされるに違いない)

こんなことになるのなら、素直にはじめから男だと名乗ればよかったとアリシアは後悔しはじめていたのだった。

(これからゆつくり、ゴールド対策を考えようと思っていたけれど、このままだと、なかなか時間も取れそうにないや。レオとも修業の約束をしたけれど、どうしたものか……)

うつぶせがちに枕を抱きしめながら、アリシアはうなりをあげていた。

「花嫁修業かあ。もし、そつだとしたら、僕を誰に嫁がせようとしているのやら」

おばさんが流れ者の娘を必死に育ててまで嫁がせようとしている相

手。

結論が出るまでに時間はかからなかった。

レオナルド。

この村には若い娘はいないとアリシアは聞かされている。

そうになると、この家は後継ぎを作るのに苦心しているに違いなかった。

(このまま、家事をみっちり仕込まれた後は、家族ぐるみで自然と僕をレオナルドとくつつけるよう仕向けるに違いない。優柔不断な僕は流されるままにその策略に乗せられちゃうのかもしれない。そして、やがては結婚。式では誓いのキスを……)

そこまで想像したところで、アリシアは生理的嫌悪感を覚えた。

(ぼ、僕は男なんだ！何が悲しくてむさい男なんかと結婚して、ましてや、あんなことやこんなことをしなくちゃならないんだ！冗談じゃないぞ！)

みだらな妄想を頭から打ち消そうとアリシアは悶絶していたのだった。

「すみませーん。レオナルドさんのご自宅はこちらでしょうか？」

低音で、それでいて安心感を与えるような声が家の中に響いた。

「はい。そうですー」

アリシアはあわてて服装を整えると、煩惱を追い払い、玄関の客人を出迎えた。

レオナルド本人はもとより、おばさんもおじさんも外出しているようだった。

「ボラムの街で開かれる剣術大会の出場の件ですが、レオナルドさんが出場の書類審査をパスしましたので、出場札を渡しますね」

くたびれたローブを着た老夫は早口でそう言うと、アリシアに木の札を手渡した。

「それじゃ、私はこれにて失礼」

要件だけを簡潔に伝え終わると、老夫はそそくさと出ていった。

札には大会名と出場番号、注意事項らしきものが書かれていたが、半分に割られており、何が書かれているのかは、はっきりと読み取ることができなくなっていた。

おそらくこれは勘合符なのだろうとアリシアは見当をつけた。

木札の残り半分は大会主催者側で管理していて、大会開催のときに本人確認をするために使うのだ。

（レオナルドのやつ、大した実力もない癖に懲りずにこんな本格的な大会に参加するつもりなのか？）

しかし、強くなるための手段として、目標を持つこと自体は悪くないともアリシアは思ったのだった。

（そうだ。いいことを思いついたぞ）

アリシアはいたずらっこのようなほほ笑みを浮かべた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

レオナルドが家に帰ってくると、アリシアが待ってましたとばかりに出迎えた。

その左手には木札を見せびらかすかのように掲げていた。

「それ、もしかして、剣術大会の出場札か？やった！書類審査通ったんだ！はは！ちょっと見せてくれよ！」

「いやよ」

「なんでさー！」

アリシアはチャージャーがバトンを扱うかのように木札をくるくると回しながら右手に持ち替えた。

「出場したければ、2週間以内に、あたしからこの札を奪ってみなさい。それができないならば、大会に出ることは諦めることね」

## 第8話 若きレオナルドの悩み

俺の名前は、レオナルド。明日の一流の剣士を目指して師匠のもとで修業をやっている。

師匠が俺に与えた試練はシンプルだ。

剣術大会に出場するために師匠が手に持っている木札を2週間以内に奪い取れ。

師匠曰く、これすらも自力で奪い取れないようであれば、大会に出ても勝ち目はないという。

敏捷性を養うためにこのような訓練をする流派があるということは、耳にしたことがある。

おそらくそれは効果があるのだろう。

だけど、この訓練を行う上で俺には看過しておれない大問題が一つあった。

俺の師匠は女の子だったのだ。

きつと、この相手が例えば、老練の達人だったり、ガタイのいいマツチヨマンだったりするならば、俺は殴られるのを覚悟で木札を奪いにかかることができただろう。

だけど、彼女の細い腕、赤い唇、白い足を見るたびに俺は心がかき乱される。

木札を奪い取るためには、きっと彼女の体のどこかに触らなければいけないだろう。

ああ、神様！

いくら生意気なやつだとはいえ、女の子の体に触れるだなんて、俺がそんな大それたことをしていいのでしょうか。

12月8日

修行開始の3日目、俺はついに勇気を出して、彼女に向って全力で飛びかかることにした。

しかし、彼女はひょいひょいと目に見えないほどの素早い動きで身をかわしていった。

教えてやると生意気に言うだけのことはあった。

しかし、人並み外れたの身のこなしを彼女はどこで身につけたのだろうか。

女の身でありながら、これだけの動きができれば、どこかの街で武術の名声を獲得していそうなものだが、それがこんな辺鄙な村にいるだなんて不思議なものだった。

12月10日

正攻法は無理だと察した俺は奇襲策にすることにした。

ぞうきんがけをしている師匠に忍び足で近寄ると背後から襲撃した。まるでやってることが変質者のようで情けなかったが、大会出場札を取り返すためには四の五の言っていられなかった。

しかし、案の定というか予想した通りというか、彼女は俺の存在を瞬時に察知すると、右手を軸に倒立をし、そのまま腕力でふわりと宙に浮かぶと、こちらにあかんべーをするのだった。

そして、肝心の俺は気付いたらその華麗な動きに見とれていた。

12月12日

俺はついに彼女が寝ている時間帯を狙って、札を奪い取ることにした。

これが男として恥ずべき行為だということは十二分に理解している。だけでも、こちらには絶対に大会に出なければならぬ、譲れないわけがあるんだ。

そつと、寝室に入ると、ターゲットはおふくると二人でツインベッドに横たわり、寝息をたてていた。

なんとという無防備。チャンスだと思った。

寝ているのにも関わらず、木札を抱きしめているようだった。



俺が深夜にやってくることは想定範囲内ということなのか。

と、いうことはだ。

ひょっとしたら、このまま寝ているところを全力で奪いにかかってもぱっと目を覚ましていつものように、ひょいと身をかわすのだから。

そついつつもりならば、遠慮はいらない。

全力をもって襲いかからせてもらうにしよう。

そう思った俺は、彼女の手首を押さえつけ、木札に手を伸ばした。

すると彼女は目を覚ますと驚いたのか急に叫び声をあげたのだった。

「きゃああああああ！」

家中にその叫び声が響き渡った。

「わわわっ！これは誤解だ！違うんだ！」

おふくろが目を覚まして、俺がアリシアの体をおさえつけている姿を目の当たりにした。

12月13日

今日はおふくろのお説教が堪えた。

「年頃の娘さんになんてことをするのっ！あんたをそんな子に育て

たおぼえはないよっ！」

いや、分かってるんだ。分かっているんだけどもっ！

俺はあの札を取り戻さなきゃいけないよっ！

必死で弁解したけれども、夜這いした言い訳にはならなかった。

あと、1週間か。こんな調子で本当に取り戻すことができるかな。

だんだん、自信がなくなってきたぞ。

## 第9話 アリシアの憂鬱

12月13日

昨日の晩はびっくりしてもものすごい声をあげてしまった。

平常心を保つことを信条にしている僕としては不覚のミスだ。

深夜にレオナルドがやって来るくらいは予想していた範囲内だったし、寝ている間も警戒を怠らないつもりでいた。

だけど、昨日は、うっかり熟睡してしまっていたのだった。

男の僕があんなはしたない声をあげてしまうなんて恥ずかしい。

いや、確かに今は女の体かもしれないけれど、いつかは男に戻るつもりだし、男のプライドを捨てたつもりはない。

だけれども、暗がりの中、手首を押さえられ、組み敷かれたあの光景を思い出すと、レオナルドと廊下ですれ違ってもまともに顔を見ることができなかった。

今のぼんやり考え事をしている隙ならば、もしかしたらあいつも僕から札を奪い取ることは難しくないだろう。

だけでも、恥ずかしがっているのは向こうも同じらしく、僕と視線を合わそうとしなかった。

なんだか気まづくなっちゃったな。

12月14日

レオナルドに呼び出された。

2人きりで話をしたいのだという。

あの夜のことを謝られるのだろうか。

それにしても、待ち合わせ場所が人のいない廃教会というのは大げさだ。

これじゃあ、まるで愛の告白じゃないか。

あいつが僕に？ははは……まさかね。

修行中にさんざん憎まれ口を叩いてきた僕が好かれるわけないじゃないか。

昼上がりの寒空の下、レオナルドと落ちあつと、老朽化できしんだ扉を開き、教会の中に入った。

ほこりつぽくて蜘蛛の糸も張っている。静かだ。

秘密の話をするにはふさわしい場所だった。

ここならば、あんなことやこんなことも……って何を考えてるんだ僕は！

こんな妄想をするようになるなんて最近の僕はどうかしてる。

話を切り出したのは向こうだった。

「俺、好きな女の子がいるんだ」

「そっか」

僕への告白じゃなくて良かったと安心しているのが半分、そんなことを相談するなんて意外だという驚きが半分だった。

「去年もボラムの街で剣術大会に出たんだけどさ。そのときに宿を貸してくれた家に俺と同じ年くらいの女の子がいたんだ。俺は一目ぼれした。誰にでも優しく笑顔がかわいくて、もしも、天使がこの世にいるとしたら、あんな感じなんだろうな。俺はどんなことをしてでも彼女を手に入れたくなった。だから、俺は彼女の前で優勝して、そして、そのまま彼女に思いを伝えたいんだ」

そこまではほっこりとした顔で語ったが、次は視線を落とすうつつむいた。

「俺はこれまで、そうやって彼女へ一途なつもりでいた。だけど、あの晩、俺は女の子、そうあんなを押し倒してしまっただんだ。それは彼女へ対する浮気なんじゃないかと思っただ」

「そんな気になしたことないのに。その彼女とやらも、そんなこと気にしてないって」

こっちのフォローを聞いているのか聞いていないのか、うつむいたままレオナルドは話を続けた。

「いや、本当に悩んでいるのはそこじゃない。このまま大会に出れないと、彼女に会うことすらできないんだ。あんたは札を奪い取れと言うが、あんたの身のこなしと己の実力を比べると、あと1週間ですれができるとは思わない。だから、頼みたいことがある。修行だなんて言わずにその札を返してくれ。俺はとにかく彼女に会いたいんだ！」

それは心の底からの悲痛な叫びのようだった。

だが、僕は心を鬼にすることにした。

「そうやって、迷っている間は大会に出ても勝ち目はないわね。大会に出て彼女にいいところを見せたければあたしから札を奪い取ってみませい。そして、彼女の前であなたの勇姿を見せてやりなさい」

## 第10話 ふとした疑問

12月15日

レオナルドの動きが以前と比べて格段に良くなった。

本人には自覚がないようだが、一日ごとに動きが着実に洗練されている。

女だからという僕への遠慮も、もはや微塵も感じない。

その目には僕から意地でも札を奪い取って、彼女に会ってやろうという意思の強さだけが宿っていた。

だが、意思の強さは逆に焦りを生み、余裕のなさを生じさせる。

僕が軽く足払いをしてやるだけで、いとも簡単に倒れてしまう。

倒れた後は間髪いれずに起きあがり、立ち向かってくる。

何をそんなに焦っているのだろうか。

このままでは片思いの彼女に会えないからか。

今年がダメでも、来年会えばいいではないのか。

それとも今年ではないといけない理由があるのだろうか。

分からないことだらけだ。

ただ、その執念が僕に立ち向かう原動力になっているのは事実であり、僕はそれに対して応えてやるのみだ。

12月16日

今日はおばさんに連れられて仕立て屋さんへ行ってきた。

おばさんは服をたくさん持っている方だったが、それでも僕と2人で着回すには足りなかったからだ。

到着した服屋は小さな街ではあるが、メインストリートにたたずんでいて豪商と思しき客も出入りしている風だった。

不思議だった。

数十年前に炭鉱が閉じてからはずっと貧しいか村であるかようにおばさんたちは言っている。

だけど、夜になれば暖かい暖炉の前で家族の団欒を楽しむことができ、僕みたいな新しい家族ができるところやってオーダーメイドのお店で服を買ってくれる。

少なくとも僕が生まれ育った首都に暮らす平均的な家庭よりかは、いくらか裕福なようにみえた。

家業の鍛冶屋が儲かっているのだろうか。

よほど腕のたつ職人なのかあるいは……。



興味のあるところではあったが、おじさんは自分の仕事については口を噤む人だったし、レオも自分の父親について語ることも少なく、居候の身として僕も積極的に聞く様な真似はしなかった。

それにしても、こうやって、一度、疑問を持ち始めてみると謎の多い家庭だ。

ごく普通の田舎のごく普通の家庭だと思っていたけど、そうではないことが日に日に分かってくる。

さて、肝心の買い物だが、店に入ると仕立て屋さんとおばさんは2人して僕に色んな服を勧めてきてくれた。

だけど、この年まで男として剣客として育ってきた僕にとっては、婦人服の流行というものがさっぱり分からない。

何を選んだらいいのかさっぱり分からないし、予算を超えるものを頼んでしまったら申し訳ないので、おばさんの趣味に完全に任せることにした。

たぶん、そんな変な服は頼まないだろう。

うん、頼まないはずだ。

12月17日

修行の札を取り戻す期限としてレオに提示した日まで今日も含めてあと3日。

ここにきて使うフェイントの種類がやたらと多彩になってきた。

あいつなりに研究しているのだろう。

だけでも、僕もそれなりの熟練者だ。

あいつの考えそうなこけおどしはだいたい僕も試したこともあるし、  
交わすくらいはお茶の子さいさいだ。

それにしても何か一つ忘れていたような気がする。

僕が使ったことのない方法でそれでいてあいつがやりそうな何かを。

## 第11話 鬼ごっこの終焉

12月18日

長かった鬼ごっここの終焉は突然訪れた。

窓ふきでよそ見をしている間に隙を見て僕から札を奪い取ったのだ。なるべく集中力は切らさないつもりでいたし、実際、奪われたときもある程度の注意を払っていた。

だが、僕が気配を感じ取ったときには既にレオの手が僕の懐に伸びていた。

瞬時に反応したが、レオの動作のほうが少しだけ早かった。

「やりい！」

レオの満面の笑みを見たときには、嬉しいのが半分悲しいのが半分だった。

男の頃だったら、こんなに簡単に奪い取られなかったのになあ。

僕はたくましくなったレオにまぶしさを覚える一方で、瞬発力がなくなってしまうた自分にわびしさを覚えたのだった。

12月19日

修行は次の段階に移った。

竹刀を使った実践的なトレーニングだ。

鬼ごっこで遠慮がなくなったレオもさすがに僕を竹刀で叩くことは躊躇するようだった。

どうやって、やる気を引き出すか考えないといけないな。

12月20日

仕立て屋の仕事は思ったより早く、注文していた服が二セット届いた。

一着は、麻と思われる材質でできたローブ。

下半分がスカート状になっているのが、かつて男だった身としては少々心もとないが、それでも、機能性はいくぶんか配慮されているようで比較的動きやすい。

デザインも質素なもので、村で着ていてもおそろく浮くことはないだろう。

もう一着が問題だった。

これでもかというくらいに袖や襟がレースで装飾されたロングドレス。

それを着用するにはコルセットや詰め物が必要なようで、着衣するだけでも相当な時間がかかるであろう代物だった。

こんなもの、庶民がどこで着るんだという疑問が沸々とわき、それをぶつけてみると

「本当は女の子がほしかったんだけどレオは男の子でしょ？だからアリシアちゃんが来て、娘ができたと思って思わず張り切っちゃったのよ」

と、返ってきた。

答えになってなくて納得できない気持ちやら高い買い物させてしまったことへの申し訳なさやら複雑な心境だ。

このまま、この家に長居すると、我が子のように親切にしてもらって、だんだん居心地が良くなって、しまいには定住したくなる。

それが今の僕にはいちばん怖いことだった。

このまま、暖かい家庭というぬるま湯に浸って、そのなれの果てに待っているのがゴルドによる一家虐殺。

それだけは避けなければならぬことだった。

今の僕に何ができる。

今はレオを鍛えることだけで自己満足に浸っているけれど、そんなものは何の根本的解決にもならないのではないか。

次の手を打たないといけない。

しかし、その次の手というものが頭に浮かばないのだった。

## 第12話 好きな人はいますか？

12月22日（前半）

「あなたには好きな人がいますか？」

それは通常は和やかな席で交わされる質問だ。

お酒の席であったり、剣術の訓練の合間の小休止であったり、そういった場で気心の知れた者同士が、さらに相手のプライベートを深く知る目的で投げかける。

初対面の相手に投げかけることはまれであるし、ましてや、命のやりとりをしているような相手にそういったことを訊くのは考えにくい。

しかし、その考えにくい質問を相手は俺に投げかけたのだ。

その相手はスミスと名乗った。

偽名によく使われることで有名な名前だ。

高い身長で筋肉質。普段から体を鍛えている風体だった。

その反面、歯は欠け落ち、髭の生やし方も著しく左右非対称でいびつ、ひとたび言葉を放つとはなはだ不快な口臭が漂う。

俺は女というものとそれほど会話をしたことはないが、女という連

中が清潔感がない、生理的嫌悪感を覚えるなどとたまにどこぞの男を形容することを何度か耳にしたことがあった。

それは、おそらくこういった男のことを指すのだろう。

俺はこの男を一度見たことがあった。

2週間ほど前の夕食後、訪ね人がいると家の扉を叩き、非礼な振る舞いから、おふくろと口論をしたのだ。

その男が今もこうして、この村をうろついているあたり、その訪ね人は見つからないのだろう。

俺は決して、人生経験が豊富ではないし、ましてや、人を見る目が養われているとはいいいがたい。

それでも、この男は堅気の人間ではないことはおおかた察しがついた。

この男が今日、突然、剣の修業をしている俺のところを訪ね、こう尋ねたのだ。

「お前は好きな女がいるか」と。

「なぜ、そんなことを聞く」



俺は質問を質問で返した。

とりたてて隠したい事柄ではなかったが、ほぼ面識のない相手に素直に答えるのには直感的に抵抗を感じたからだ。

「お前の返答次第では死人が出るかもしれない」

低くドスのきいた声で俺の耳元でささやいた。

本気なのか、はたまたこけおどしなのか。

全く判別はつかなかった。

ただ、そこまで言われてしまった以上は無意味な隠し事をする事には利益がないと思った。

「いる」

「それはこの村でアリシアと呼ばれている女か？」

（違う）

その気になればそう即答できる質問だった。

だが、この男が返答次第では死人が出ると言ったことが引っかかる。

この男は俺にどういった答えを期待しているのだろうか。

仮にイエスだと答えたら、あるいはノーと答えたら誰を殺すつもりなのだろうか。

あるいは、好きな人がいると答えた時点でもう既に間違いを犯してしまっていたのか。

疑問はつきなかった。

そもそも、この男が他人に手をかける前に自分がこの男を倒すべきなのか。

あるいは大声を出して助けを呼ぶべきなのか。

そういったことまでもを頭の中で検討しはじめると、沈黙の中、時間だけがいたずらに過ぎゆくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2918y/>

---

女の子になった少年剣士

2011年11月28日06時47分発行